



郷 土 ち が さ き

第165号

発行日 令和8年2月1日
 発行者 茅ヶ崎郷土会
 会長 平野文明
 編集 平野文明

【風自由投稿】五題 (宮本武二・川村恵・川村美子 ・長谷川由美・藤間克子)	2
【調査・史料・資料・論考】○旧相模鉄道 (齊藤和夫)	
○旧相模川橋脚の橋材 (加藤幹雄) ○忠相日記 (野田穂)	
【事業報告】○山中城跡探訪○大磯町の東海道探訪○大磯	
町探訪参加の記○56回郷土芸能大会写真記録	12

さる程に、あらたまの年立ち返れども、内裏には朝挙げ(ちようはい)もなし、節会(せちえ)も行はれず。

『太平記』巻第十四 「將軍御進發、大渡(おほわたり)・山崎等合戦のこと」の冒頭の一文です。建武三年(一二三六)の一月一日、足利尊氏の都攻めで大軍が近づいているというので、朝廷では新年の儀式などやっている場合ではないという場面です。仲間と行つている『太平記』の輪読会で一月にこの部分を読み、「あらたまの年立ち帰れどものところに私はオヤツと思いました。

時間というものは帯のように長く延びていて、この世の「今」は、帯の上を刻々と移つているようなもので、過ぎ去った所へ帰ることや、一足飛びに未来へ行くことはできないと考えられています。しかし太平記の時代の「年」というものは立ち返ることのできる年だったのか、と思ったからです。

立ち返ることができる時間ならば、もう一度挑戦することもできるはず。私たちを一方的に未来へ押し流している時間ではなく、私たちに寄り添い、私たちを包んでくれていた時間も昔はあつたのだなと思った今年の年頭でした。

(茅ヶ崎郷土会会長 平野文明)

風

自由投稿欄

やまなみハイウェイ

搭乗機は、四国土空から機首を下げ着陸態勢に入った。上空の空は、碧く澄みわたり眼下の島々を浮き立せている。

目的地熊本へ大分を廻つて行くことにしたのは、大分県別府市と現在の熊本県阿蘇市一の宮を結び、「やまなみハイウェイ」として昭和三十九年に供用が開始された道路を自分の目で確認したいと思つたからである。処女地を開拓して建設された快適なハイウェイは、今では別府、熊本、長崎へと延長されている。観光バスもあるが、今回は、空港からレンタカーで行くことにした。

別府の町から急に、七〇〇メートルの高地へと登る。城島（きじま）高原（きじまこうげん）である。なだらかな丘陵の斜面が波打つようになり、草原の奥には点々と洒落たホテルが建つている。頬をなでる初秋の高原の涼風が心地よい。牧草を食べながら遊ぶ乳牛、柵の中をたわむれながら駆け回る仔馬たち、草原の中の牧場風景は、異国情緒豊かな北海道を思わせるのである。そして、九州には珍しいサイロの褐色の屋根が印象的であつた。

車は、道路わきのススキをなびかせながら、水分峠（みずわけとうげ）へと登る。別府の裏山というには大きすぎる由布岳を遠

望し、眼下に沈むのは温泉の湧く湯布院盆地だ。ここで、九州山脈は東と西に分かれている感じである。

水分峠から少し下りになつた。ここからが九州横断道路の本格的魅力であった。車窓左に、満々と湖水を貯えた天然の火口湖、小田ノ池、そして山下ノ池が見えてくる。この二つの湖がおりなす眺望は、この辺りを訪れる観光客を、まるで絵本の中にいるような錯覚におどしいる景色が広がっている。この素晴らしい風景にみとれながら、ここでしばらく小休止することにした。

人呼んでやまなみハイウェイといわれる九州横断道路、なるほど眺めるのは茫漠たる山脈の展開である。道路が比較的山の表面を走つているため、視野が広い。同じ山を走る道路でも、谷底を縫つて走るそれとは全然違う。

遠くの山は、走るにつれて形を変える。近くは不毛の禿山の斜面である。山というよりは広大な土地が横たわつてゐるようである。もちろん、カーブの多い道路であつた。カーブに差し掛かるたびに青みがかつた遠景が目に触れ、同時に新たな風景が眼前に迫つてくる。

宮本 武一

車は阿蘇谷に向かつて走り続けた。不意に視界が開けた。九十九折りに道路が下りになり、これから走る道路が見えている。前方の小さな盆地は飯田高原であった。山が全体に赤茶けていて、白い道路が見え隠れしながら、この際限のない広がりの中に、糸のように細くなるまで見えているのである。これほど雄大なハイウェイは、他では見ることはできない。しかし、車はその道路も短い時間で走破してしまった。盆地を抜けると再び登りとなり、やがて前方に噴煙を上げている山が見えてきた。ここからはまだ阿蘇は見えない。九州の最高峰である久住山の外輪、硫黄山である。立ち上る噴煙は、硫黄のガスで、山がすつきり晴れていることは殆どないのだという。

九州の屋根ここ久住山麓は、やまなみハイウェイの中央部、長者原高原（ちょうじやばるこうげん）と呼ばれる海拔二二〇〇㍍の広大な裾野を広げている。独特の湯治場「寒の地獄」、それに「牧ノ戸温泉」、ユースホステルなども建つており宿泊に最適の地である。

見渡す限りの空と山と高原の斜面、空は突き抜けたように碧く高く澄みわたり、ススキの穂を波打たせながら、高原を吹き抜けの風は下界より早く、もう秋の気配を感じさせていた。この大自然のど真ん中にいると何かとあくせくと暮らしている毎日が侘しくなつてくる。画家か写真家で、このような風光明媚な地を探して歩けたらどんなにいいことだろう。以前に、阿蘇をモチーフに長年制作を続いている洋画家が雑誌に書いていた。「九州の山は、信州のそれと比較すると、山の中に入らんくらいの高さであるが、それでいて雄大な広がりがある。鋭い、突つ立つていていわゆる山ではなく、非常に絵画的に禅味があり、永遠性を感じさせる魅

力がある」となるほどじつと眺めていると心が落ちしていくから不思議だ。心が洗われる思いであつた。

ハイウェイの最高地点牧ノ戸峠から、道路は急カーブを描きながら阿蘇へ向かつて一挙に下り始める。悠々と煙たなびく阿蘇五岳をバックに大草原が広がり、牧歌的ムードあふれる瀬の本高原である。この辺一帯は、大昔、海峡であったが、度重なる阿蘇大爆発の溶岩で埋め尽くされ陸地となつたところだ。そこは、熊本地震の震源地と断層が重なる。

最後のゲート城山を通過すると眼下に阿蘇谷が開けて、その中央にそびえ立つ阿蘇の紺色のシルエットが手に届きそうに近くなつていた。しかし、その雄大さは、われわれの物差しではどうにもならない。気が遠くなるような大きさの外輪山に囲まれた阿蘇谷には、千数百㍍の山が五つも立ち並び、その平野部には十万余の人々が住み、五岳の裾をJR豊肥線が走っているの



熊本城

である。車は、阿蘇五岳の美しい眺めを左に見ながら豊肥線にそつて走つた。夏目漱石が小説「二百二十日」を書いた内ノ牧温泉ももうすぐである。観光バスが何台も登つてくる。

この辺りは、急勾配を登るため鉄道線路は、スイッチバック（列車が折り返して後退し、別の線に入つて前進する仕組み）となつていて、私は、一路熊本に向かつて下る。

旅の疲れと興奮の中、肥後平野まで下りてきた。昔、天狗が出たという大津街道の杉並木を抜け、武蔵塚（宮本武蔵の墓所）へとやつてきた。宮本武蔵は、晩年細川家に仕え、『五輪書（ごりん

のしょ）』を著したが、この地にて参勤交代のため江戸へ向かう藩主の行列が通過するのを見守つたという。

こゝに茂つた森の中に、熊本地震で崩壊し緊急復旧工事により再建された熊本城の天守閣がその偉容を見せると、この高原を快適に走破した旅は終わりを迎えた。熊本に到着したのは、まだ夏の日差しを感じさせる午後であった。

ロンドンのクリスマスヒューリック

川村 恵（在 ロンドン）

今日、十二月九日、ロンドンの街は寒くて暗いですがクリスマス気分で盛り上がつております。とは言え、今年は大手スーパー・マーケットのアズダ（Asda）が八月からクリスマスの商品を売り始めた事がニュースの話題になりました。英国のロックバンドのウイザード（Wizzard）の一九七三年のヒット曲「I Wish It Could Be Christmas Everyday」（毎日クリスマスだつたら良いのに）は、いまだに英国では愛されていますが、「真夏からクリスマス？」との声も多いそうです。何日、これからがクリスマス時期かと考えると、個人的には一七〇七年に創立したデパートのフォートナム・アンド・メイソン（Fortnum & Mason）がクリスマスショーウィンドーを見せ始める時ですね。今年は十一月一日でした。

十二月に入るとさすがに英國のデジタルラジオ局のマジック FM

M（Magic FM）が毎日二四時間クリスマス音楽だけを流します。自宅の猫、チヨコちゃんはサイベリアン猫で、この種は寂しがり屋で留守番が苦手なのですが、調べてみましたら、ラジオをつけおくと少しばかり安心し、猫にとってはクラシック音楽がストレスを減らすことでした。また、クラシックFM（Classic FM）は英國の地上テレビのラジオチャンネルで、毎日一日中クラシック音楽を流しますので、長時間の留守の時はこのチャンネルをつけて出かける」としているうちに私も好きになり、ラジオをつけたままチヨコと聞くことがあります。チヨコは時々音楽のリズムに合わせて毛づくろいしたり、尻尾をタップして指揮者のように楽しませてくれます。

今年の三月まで私も一年間毎週ピアノ学校に通つていまして、

ピアノの先生が「Sir András Schiff is the greatest pianist (サー・アンドラーシュ・シフが一番のピアニストですよ」とおっしゃいましたので、十月九日はヴィクトリア時代に建築されたウイグモア・ホール (Wigmore Hall ロンドンにある著名なコンサートホール) でのコンサートに行きました。高松宮殿下記念世界文化賞を最近受賞されたアンドラー・ショ・シフさんの演奏は大変すばらしく、会場中がそのデリーケートなニュアンスを、よく聞くために息も止めているような真剣さでした。曲の間にも説明をして下さり、「ベートーベン・モーツアルト・ハイドンの有名な曲のほとんどはウィーンで作曲されました」とおっしゃった時はびっくりしました。ウィーンは音楽の街と言われていますが、何百年たつても愛される音楽のインスピレーションはウィーンにあり、ロンドン発の音楽の歴史はまだ浅いかもしれないですが、クラシック音楽を愛する熱意では負けていません！

それで、なぜ英国では一日中地上テレビでクラシックが流れるほどに好かれているのかと思いはじめ、本屋さんに行きました。やはりヴィクトリア時代（一八三七年から一九〇一年）に答えるが



ピアノの先生が「Sir András Schiff is the greatest pianist (サー・アンドラーシュ・シフが一番のピアニストですよ」とおっしゃいましたので、十月九日はヴィクトリア時代に建築されたウイグモア・ホール (Wigmore Hall ロンドンにある著名なコンサートホール) でのコンサートに行きました。高松宮殿下記念世界文化賞を最近受賞されたアンドラー・ショ・シフさんの演奏は大変すばらしく、会場中がそのデリーケートなニュアンスを、よく聞くために息も止めているような真剣さでした。

その時代の音楽を同じホールで、あるいは、今は家のラジオで聞くことができます。その毎年～の積み重ねで広く愛され、続いている。私にとっては茅ヶ崎郷土会もそのような存在で、ロンドン住まいでいつもは茅ヶ崎に行くことが出来ないのが残念ですが、何か月に一回届く会報誌を楽しみにしているうちに、茅ヶ崎と触れることができ、これも愛し、愛されて続いている楽しみです。



スコットランドを訪ねました



美穂さんの結婚式

「〇一六年、明けましておめでとうございます。日本でも年末に「螢の光」をよく聞きますが、実はスコットランドの曲で、「Auld Lang Syne（オールド・ラング・サイン）」という十八世紀からの歌です。

英國はイングランド、ウェールズ、北アイルランドとスコットランドの連合国です。イングランドの旗は日本と同じく白と赤ですが、スコットランドは青と白で、実はヨーロッパで一番古い旗です。八三二年から使われている節があります。これを見ても、スコットランドの歴史が由緒あると分かりますが、オールド・ラング・サインはスコットランドが年

末から年始に入る時に歌われるとの習慣が英国中に行き渡り、それが今、日本にまで伝わっていることがあります。ヨーロッパでこれが、オーツ麦と混ぜています。

ハギスは羊の内臓を玉ねぎ、オーツ麦、スペイスと混せて、羊のお腹に入れて茹でます。

ハギスは、ラックブティングはこれと似たものですが、豚の血と油をオーツ麦と混ぜています。

ローランソーセージは、コーンビーフに見えますが、四角いソーセージです。

ポテトスコーンはマッシュされたジャガイモの甘くないパンケーキです。

四十一年前、エジンバラのホテルでスコットランド

川村美子（在ロンドン）

料理を食べた後、オールド・ラング・サインを歌つたのを思い出します。ちなみに、昨年十一月の初旬、久しぶりにスコットランドに行きました。その理由は還暦を迎えた美穂さんのお祝いに招かれたからです。三十年前、ロンドンで出会った美穂さんがスコットランド人と結婚されました。主人が民族衣装のキルトを着てエジンバラ城をバックにしている記念写真があります。その後ずっと定住されていますが、ご自宅ではスコットランド名物料理が出ました。

ハギス（Haggis）、ブラックパティング（Black Pudding）、ローンソーセージ（Lorne Sausage）、ポテトスコーン（Potato Scone）。一つ一つが珍しいものです。

ハギスは羊の内臓を玉ねぎ、オーツ麦、スペイスと混せて、羊のお腹に入れて茹でます。

ハギスは、ラックブティングはこれと似たものですが、豚の血と油をオーツ麦と混ぜています。

ローランソーセージは、コーンビーフに見えますが、四角いソーセージです。

ポテトスコーンはマッシュされたジャガイモの甘くないパンケ

茅ヶ崎も砂浜の海岸が有名ですが、スコットランドの首都エジンバラにはポートベロと言う有名なビーチがあり、北海です。美穂さんは年中ここで水泳をしていますので、ロンドンに帰る前に寄り、私の主人も一緒に海に入りました。北極から、アザラシと共に流れてくる水は確かに冷たかったです。その後そのまま

の展示が十月六日から開かれており、ちょうど見に行くことが出来ました。多くの人が心から平和を訴え、その場で心を打たれた観覧客からお祈りを依頼されました。スターリングは映画『ブレイブハート』(一九九五年のアメリカ映画。スコットランドの独立のために戦ったウイリアム・ウォレスの生涯を描く)でも知られているウイリアム・ウォレスで有名な十三世紀の戦場です。それを記念とするモニュメントもあります。



スコットランド料理

ガイドさんの説明によるとこれらは節約であり長期保存のための料理だそうです。聞こえはあまりおいしそうではありませんが、食べてみるとおいしいですよ！

スタークリング大学
(スコットランドにある英國の国立大学)で

「追憶 広島・長崎への原爆投下から八十年」

ま空港に行き、ロンドンに帰りました。スコットランドの水が魂に響いたそうです！
まだまだスコットランドについては記すべきことがありますのでまたの機会で書かせていただきます。今回八年ぶりのスコットランド訪問となりました。近くにあると思っていましたが、実はスコットランドは計り知れない国です。ネス湖のネッシーのような謎が浮かび、日本の故石原慎太郎氏もその魅力にひかれ、ネッシー探検隊の隊長になられたのでしょうか？人生のロマン、苦難など永遠に残るテーマに溢れるスコットランドにエールを送ります。



エジンバラのビーチ ポートベロ

茅ヶ崎市民文化祭は65回目

文化団体協議会も65周年

長谷川由美

昨年、茅ヶ崎市民文化祭は65回目。

茅ヶ崎市文化団体協議会、略称「文団協」は創立65周年を迎えた。

市民文化祭は、存じでも、文団協は知らないという方も多いと思います。実は、茅ヶ崎市民文化祭を主催し、運営しているのが文団協です。そして茅ヶ崎郷土会も文団協に加盟しています。

文団協の創立は、1960年。初代会長となる斎藤昌三氏はじめ、牧野英一氏を会長とする「茅ヶ崎文化人クラブ」が中心となって設立されました。

あれ? お二人の名前を聞いたことがあるのでは?

斎藤氏は、古書学、蒐集家、発禁本研究などで「書痴」と呼ばれた奇才。茅ヶ崎市立図書館の名譽館長でもありました。2023年には、茅ヶ崎市美術館で「小さな版画のやりとりー斎藤昌三コレクションの蔵書票と榛の会の年賀状」展がありました。ご覧になつた方もあると思います。

牧野氏は、茅ヶ崎市民文化会館1階ロビーに肖像画が掲げられている茅ヶ崎市の名誉市民のお一人です。法学者で東京帝国大学名誉教授、執行猶予の積極的な活用を提唱され、和歌にも精通されていました。そうです。

さて、文団協の設立と同時に、文化祭の準備も進められ、同年10月第1回文化祭が開催されました。当時の参加は、菊花、華道、洋舞、写真、茶道、俳句、短歌、郷土会、謡曲、文化人クラブ、音楽の11ジャンルでした。茅ヶ崎郷土会も設立の主要メンバーだったことがわかります。翌年には邦楽邦舞、美術、1967年には、吟剣詩舞、民謡民踊、盆栽、書道が参加し、さらに手芸、三曲、日舞、映像演劇、軽音楽、祭囃子、創作音楽と、徐々に部会が設立されました。現在は休部や、解散した団体もありますながら、19ジャンルの活動があります。

ジャンルごとの部会に、市内で活動する団体が加盟、茅ヶ崎の文化振興と自身を磨くこと、発表を通して、年に一度は一堂に会し文化祭を開催してきました。初期の文化祭の会場は分散型で、1975年には、初めて旧福祉会館を中心に、他に茅ヶ崎小学校講堂などでも開催されました。1980年、ついに茅ヶ崎市民文化会館が完成。落成記念とともに創立20周年事業が行われました。

かくいう私は、まだまだヒヨツコの若手?として、2011年創立50周年記念事業から演劇ジャンルで参加し、事務局としても活動しています。50周年記念の合同舞台は、各部会からの出



演者だけで250人余り。浜降祭の起源をモチーフにした演劇に、合唱、詩吟などなどが織り込まれたものでした。文化会館大ホールが、ほぼ満席となり、茅ヶ崎はなんてすごいまちだろう！と思いました。文団協の構造や歴史は全くわかりませんでしたが、それまで触れたことのない伝統芸能から、まちの歴史に触れる機会が、文化祭はもちろんのことふんだんにあって、どれもがそれでの生活の中で息づく、生きた文化活動だったからです。

2020年、コロナ禍の際も茅ヶ崎市民文化祭は、その歩みを止めるることはありませんでした。ネット配信を希望した部会により、無観客収録によるオンライン文化祭が開催されました。コロナ禍が開けた2022年には、主催から茅ヶ崎市が外れて補助がなくなるという大きな転機を迎えるました。正直なところ、幾つの部会が残るのだろう？と心配しましたが大きな変化はありませんでした。

2025年、65周年を迎えるにあたっては、イベ

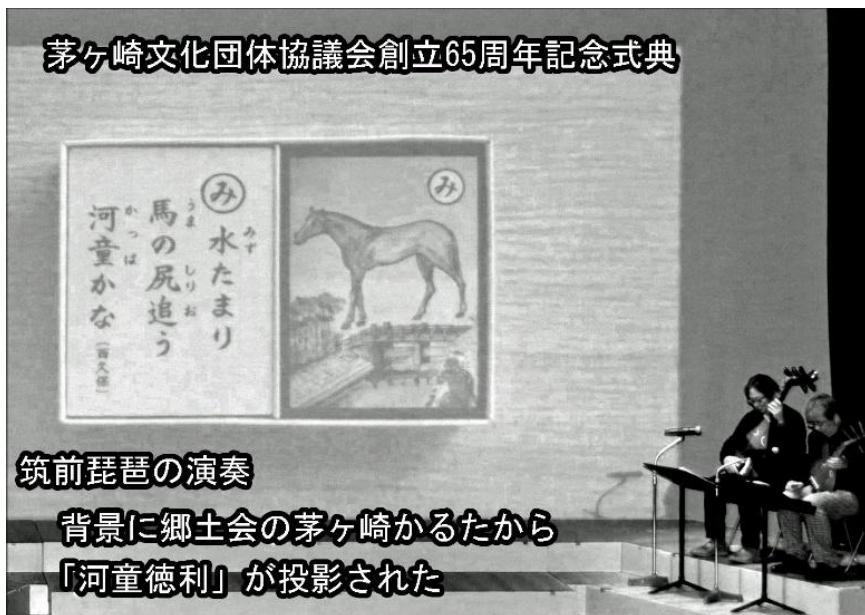
ントのあり方の変化や、高齢化などを踏まえ、実行委員が協議をし、記念事業を組み立てました。そして、式典、永年の活動への表彰、展示、合同舞台が、2025年11月16日に行われたのです。ここに記念事業について記し、運営に携わったみなさまに敬意を表したいと思います。

これからも茅ヶ崎の市民による文化活動が発展していくことを願い、私もしっかりと勤めていきます。

2025年11月16日に、茅ヶ崎市民文化会館小ホールで文化団体協議会の創立65周年記念式典を行いました。

内容は、記念式典と表彰式、また各団体が次のような合同舞台を行いました。

- 日舞&祭太鼓「俵積み唄」とお囃子——日舞・祭囃子部会
- 筑前琵琶「河童德利」と茅ヶ崎郷土会作成「茅ヶ崎かるた」投影——邦楽部会・茅ヶ崎郷土会
- ハワイアン——音楽部会
- 群説「どっこい」——北原白秋「わっしょい」より浜降祭バージョン——映像演劇部会
- 吟詠&箏演奏——吟剣詩舞・三曲部会
- 箏・尺八演奏——三曲部会
- 舞台上のざる菊／菊花——菊花部会
- 花と花器——華道・工芸造形部会
- 式台の松——盆栽部会
- 皇茶——茶道部会
- 舞台監督／転換——映像演劇部会
- 祝いの俳句／短歌展示——俳句・短歌部会



受付 — 音楽・軽音楽部会
記録撮影 — 写真部会
実行委員 — 各部会より選出

茅ヶ崎郷土会へのお誘い

茅ヶ崎の歴史と文化、自然に関心を寄せる会員が、楽しみながら活動しています。

会のモットーは、郷土を歩き、学び、発信して楽しむ、そして仲間づくり!!

郷土会の会員は現在約60名です。
あなたも一緒に活動してみませんか!!

年会費1,500円(入会金なし)

代表者 平野 文明

連絡先 090-8173-8845

E-mail f.hirano@ozzio.jp

活動内容

歩く

- ・市内の史跡や歴史を訪ねるまち歩き
- ・県内各地の歴史探訪

学ぶ

- ・茅ヶ崎の史跡文化財の学習会
- ・『茅ヶ崎市史』輪読会

発信

- ・会報「郷土ちがさき」の発行
- ・会報への投稿
エッセイ、俳句、短歌、読書紹介、論考など
- ・HP 「茅ヶ崎郷土会」で検索

短歌七首

身のめぐり

藤間克子（新暦短歌会々員）

ふるごとを思えば鎮守の森うかぶ遊びし友ら恙(つ)があらずや

春くれば咲くのだろうか鞍椿鎮守の森のひたなつかしく

恙なく今日を終(しま)えるありがたき明日はあした成りゆくまゝに

老いたとてみそ汁くらいは作りたし出来なくなるのは淋しきの極み

いつもより一時間超寝過ぎすも苦情もあらず言い訳もいらず

久々に先祖の墓の前に立つ誰(た)が挿してくれし新しき萬

ちよとーたことをつい先延ばし貰いし渡柿まだ吊るせない

調査・史料・資料・論考

想い出の旧相模鉄道

齋藤和夫

はじめに

神奈川県中央部を南北に流れる相模川の左岸は比較的平坦な相模原台地でその南側は砂丘地帯と呼ばれる低地となつて農業や小規模商業地として発達してきました。現在のJR相模線は上記相模川左岸地域の茅ヶ崎・橋本間を結んでいてその前身は私鉄の旧相模鉄道(以下旧相模と略称)で、大正六(一九一七年十二月に地元の茅ヶ崎、相模原等の素封家や京浜地区の資本家の出資により設立されました。

その主旨は県中央部の地域産業・交通、大山信仰、丹沢・温泉地観光等の振興を目的としたものと思われます。さらに東海道線と中央線とを短絡して将来のバイパス機能に備える意図もあつたようです。また、相模川の砂利採取・輸送・販売の目的もありました。工事は大正八(一九一九年十一月に始まりましたが用地買収や資材調達による遅れもあってあまり順調ではなかつたようです。

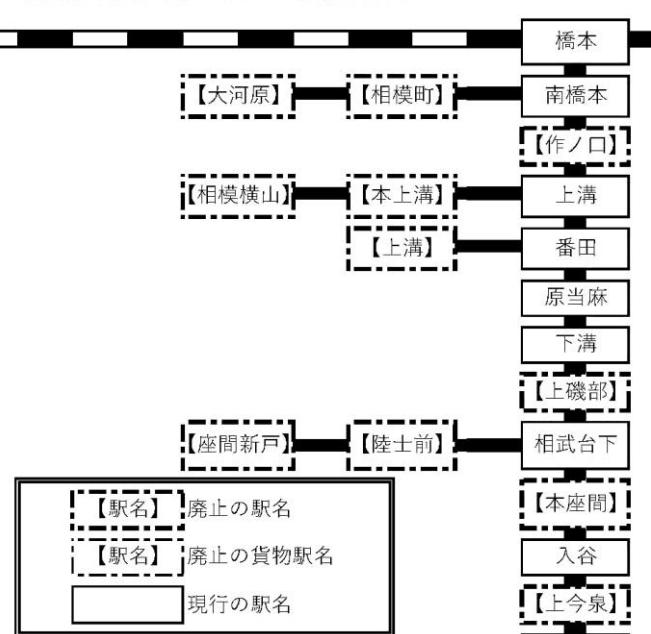
当初の計画路線では茅ヶ崎—厚木—上溝—津久井—八王子に至るものでしたが工期や資金の関係で現在の茅ヶ崎—厚木—上溝—橋本に変更されています。大正十(一九二一年九月には茅ヶ崎—

寒川間が開通、大正十五(一九二六年四月には倉見まで、同年七月には厚木まで開通しました。さらに昭和六(一九三一年四月には橋本までの全線が開通しています。昭和十一(一九三六年一月には橋本から横浜鉄道(現横浜線)に乗入れて八王子まで運行していました。寒川からは川砂利輸送の川寒川駅と従業員輸送のための西寒川支線も開通しましたが昭和五十九(一九八四年三月に廃線となっています。

川砂利供給を目的としたもう一つの鉄道が大正八(一九一九年六月に設立の神中鉄道(以下旧神中と略称)です。大正十五(一九二六年五月に厚木—二俣川間の旅客運輸も開始、順次路線を伸ばして昭和八(一九三三年十二月に横浜に達していました。大正十二(一九三三年九月の関東大震災後の一時復興により川砂利の需要が増えて営業収支に貢献したそうです。

昭和十六(一九四一年十一月の太平洋戦争の勃発により輸送力の増強の国策のもとで昭和十八(一九四三年四月に旧相模が旧神中を吸収合併して私鉄のまま相模鉄道となりました。そして茅ヶ崎—橋本間は相模線、横浜—海老名間は神中線と呼ばれました。

相模線の駅名（廃止になった駅名を含む）



この駅名表は『ふれあい朝日』No.280-2011/10/1刊（湘南新聞販売株式会社ふれあい朝日編集部編）所収の駅名表を許可を得て参考にし作成しました。（編集子）



北茅ヶ崎駅(旧日東駅)

旧日東駅(現東邦チタニウム)の隣には武運長久の大きな文字がありました。上下列車の交換駅のため駅長や駅員が手動でタブレット(通票交換や転轍機(てんてつき))の操作を行っていました。現在は自動化されています。

茅ヶ崎駅

しかしまたも国策により昭和十九(一九四四)年六月二私鉄の相模線のみが買収され国有の相模線となりました。このことは東海道線と中央線とを短絡するのみならず沿線の軍需施設や関連産業を強化する狙いもあつたようです。一方の神中線は分離独立して新しい私鉄の相模鉄道として発足し現在に至っています。

東海道線の駅開業は明治三十一(一八九八)年六月で旧相模は大正十二(一九二二)年九月の開業になります。昭和十七(一九四二)年ころの記憶では当時の東海道線下りホームの南側付近は葦の生えた湿地帯で今の交番のあたりには藤棚と客待ちの輪タクがありました。旧相模のホームとの間には貨物側線があり当時、フオーリクリフト等は無く前掛けをした作業員が貨車の荷下ろしをしているのを眺めていたものです。北口には現在の中央通りは無く厳島神社(石神弁天社)や大井写真館がありましたが現在地に移転しています。

当時の路線バスは平塚、寒川、南湖院、藤沢、小出の五系統があり、東側の一里塚通りと西側の新町(新栄町)通りの発着となっていました。駅構内にはかつて石神古墳があつたそうです。

駅舎横には三島神社の小さな祠がありますが由来は不詳です。

円蔵駅(無人廃止駅)

香川台駅(無人廃止駅)
大山街道踏切のところにありました。

香川駅

浄見寺、市立博物館、下寺尾七堂伽藍遺跡の最寄り駅です。近くには安永の飢饉の際、村人のために灌漑を図り年貢減免を訴えて処刑された義人三橋勘重(十郎)が作ったという堀跡や浄心寺に勘重郎の供養塔があります。また、間門川(小出川)畔には伝説の河童徳利の記念公園が出来ました。

寒川駅

旧相模第一期開通時の終点駅です。当時、川寒川、西寒川の分岐支線がありましたが昭和五十九(一九八四)年三月に廃止となり一之宮緑道となつて一部にレールと車輪が残っています。石橋山で平家に敗れた源頼朝が洞窟に潜んでいたのを知りながら見逃したという梶原景時の館跡が近くにあります。対岸の田村には田村の渡しがありましたが現在は神川橋となっています。



寒川駅の分岐支線址に残してある車輪とレール

宮山駅

旧國幣中社相模国一之宮寒川神社の最寄り駅です。無人駅ですが正月三が日には多くの参拝客が訪れるので臨時の駅員が客扱いをしています。

倉見駅

開通当時のアーチ状入口の面影を残している駅舎です。線路際の公園の桜が見事です。東海道新幹線との接続駅設置の運動が行なわれています。

門沢橋駅

江戸時代には対岸の戸田との間に戸田の渡しがありましたが現在は戸沢橋となっています。

「村の渡しの船頭さんは今年六十のお爺さん・・・♪」(童謡)

社家駅

駅の所在地は江戸時代の高座郡社家村内にあるので、駅名は村の名から付けられました。倉見駅と同じ開通当時のアーチ状の面影の駅舎です。

厚木駅

所在地は海老名ですが旧神中線(現在の相模鉄道、略称「相鉄」)が相模川を越えて厚木町への延伸を計画したために厚木駅となつたそうです。現在の相鉄線海老名駅——かしわ台駅の中間地



点からJR厚木駅まで並行して連絡線があり、今も相模鉄道の留置車両が見られます。現在は小田急線との連絡駅です。

海老名駅

海老名には相模国の国府が置かれていて、近くに国分寺、国分尼寺がありました。国史跡として礎石や塔跡が残っています。

JR海老名駅は昭和六十二(一九八七)年三月に小田急線の駅の北側に開設されました。

相武台下駅

陸軍士官学校が移転して来たとき昭和天皇が一帯を相武台と命名したそうです。小田急線には相武台前駅があります。

下溝駅

丹沢・大山や眼下に相模川を望み人工の三段の滝もある沿線唯一の景勝地です。近くに縄文中期の勝坂遺跡や勝坂遺跡公園(相模原市南区)があります。

原当麻駅

藤沢遊行寺と同じ時宗の当麻山無量光寺があります。

上溝駅

相模原には広大な旧陸軍施設があつたため、かつては今上の溝駅から、西の八王子街道にかけて、街並みが形成されていました。近くに小栗判官と照手姫の悲恋の伝説が残されているそうです。

橋本駅

リニア新幹線の仮称神奈川駅の開発工事で駅周辺は様変りしています。伝統校の相原農蚕高(相原高校)も移転しました。サラダ記念日の気鋭の歌人俵万智は橋本高校で勤務していた時期がありました。戦時中、応召兵士の一部は旧相模鉄道橋本経由で甲府連隊に入営したそうです。

往年の車両等

○流線形ディーゼル式電動客車 車載のディーゼルエンジンで発電機を駆動しモーターに電力を供給して走行する車両です。昭和十一(一九三六)年一月から、橋本から八王子まで新車四両が導入されて乗り入れ、運行していましたが終了時期は不明です。

○蒸気牽引客車列車 社型電車(日本国有鉄道が私鉄を買収するとき、私鉄が使用していた電車を社型電車と呼んで使っていた)の大形小形の混合編成で運用していましたが戦時中の石油燃料節約のためディーゼル車は休止となり蒸気運転に置き換えられました。また、蒸気運転では起動停止に時間がかかりダイヤ上不利なので小規模無人駅は整理廃止されました。自動車は戦後も暫くは石油燃料節約のため燃焼缶を背負った木炭自動車も走っていました。

○電車型客車(新車) 国有化買収直前なのに何故新造したのか疑問が残ります。

その他にテンダー式蒸気機関車、小型二軸客車、大型ボギー客車等がありました。車両基地は茅ヶ崎駅を発車して左カーブを北に向かつた国道一号のガード手前の、本村踏切の手前の線路西側にありました。

おわりに

現在の相模鉄道(旧神中線)は令和元年十一月に横浜―海老名間本線の中間駅西谷から分岐してJR羽沢横浜国大、武藏小杉経由JR湘南新宿ラインに乗入れて直通新線を開通させました。また、令和五年三月には同じくJR羽沢横浜国大、新横浜、東横線日吉経由の直通新線を開通させ都心指向としています。地方私鉄ながら八両から一〇両編成の輸送力や施設の近代化を図り大手私鉄に伍した地位を占めるに至りました。

一方のJR相模線は開通以来単線非電化のままで平成三(一九九二)年三月に電化されましたが、単線四両編成では輸送力の增强も望めません。現在工事中のリニア新幹線の橋本付近の仮称神奈川駅の完成や、さらに複線化されて倉見駅での東海道新幹線との接続駅が出来れば飛躍的に発展するであろうことを期待したいと思います。

【参考資料】

- ① 茅ヶ崎市史四 通史編 昭和五六年三月三一日 茅ヶ崎市
- ② 茅ヶ崎市史五 概説編 昭和五七年三月三一日 茅ヶ崎市
- ③ 茅ヶ崎きのうきょう 昭和六二年一〇月一日 茅ヶ崎市
- ④ 茅ヶ崎の道 橋田豊宏 平成一六年一〇月一日
- ⑤ ふれあい朝日No.280 相模線 平成二三年一〇月一日
- ⑥ 鉄道ピクトリアルNo.320 特集相模鉄道 一九七六年五月
- ⑦ 鉄道ピクトリアルNo.468 特集相模鉄道 一九八六年八月
- ⑧ JR相模線物語 一三〇クラブ サトウマコト 二〇〇〇年一二月一五日
- ⑨ 相模線沿線散歩 神奈川新聞社 西村孝昭 二〇〇一年九月一〇日
- ⑩ 茅ヶ崎歴史快道 楊井一滋 二〇一四年三月一八日 夢工房
- ⑪ 鉄道ジャーナルNo.693 一〇一四年七月
- ⑫ 都市の直通運転 神奈川新聞社 森川天喜 二〇一四年十月一七日
- ⑬ かながわ鉄道廃線紀行 森川天喜 二〇一四年十月一七日

旧相模川橋脚の橋材はどこから来たか2

関東大震災で出現する以前の旧相模川橋脚の様相

加藤幹雄

門沢橋村 加牟之由明神の説明の中に、稻毛重成が架橋の際、この神社へ太刀を奉納したこと、及び渋谷庄遠馬郷（おんま）うの遠馬三郎、大谷郷の大谷四郎に依頼し、大谷郷浜田、遠馬郷楫久保より橋材を採伐したこと、橋材運行にあたり、明神の神護を得て無事に成願したことが書かれています。

はじめに
 「郷土ちがさき」の一六四号（前号）にて『鷹倉社寺考』（たかくらしやじこう）【注1】に記載されている相模川橋脚部材の出所や、架橋した稻毛重成に関わる伝承を紹介しましたが、本号では『鷹倉社寺考』を調べていく過程で、関東大震災にて旧相模川橋脚が出現する以前の橋脚と思われる記述がありましたので、前号の続きとして報告します。

まず、前号で述べた「旧相模川橋脚の橋材はどこから来たか」の内容を簡単に紹介します。

『鷹倉社寺考』に橋材に関する記述は二か所あり、一か所は杉窪村【江戸時代は高座郡杉窪村、現海老名市杉久保】の豊受皇太神の項に、もう一か所は門沢橋村【江戸時代は高座郡門沢橋村、現海老名市門沢橋】の加牟之由明神（かみのいわれみょうじん）の項でした。

杉窪村 豊受皇太神の説明の中に、稻毛重成が相模川架橋の際に、神仏の加護を得るために、この神社に絹布と神馬を奉納したことが書かれています。

本号では、『鷹倉社寺』を調べていく中で『相模国郷帳』【注2】という江戸時代の記録があることを知ったところから記します。この記録は、徳川幕府が正保・元禄・天保に作成した公式の『郷帳』ではなく、海老名市の旧家小沢家に伝わる古文書で、表紙が逸失しているため、後世になつて『相模国郷帳』と名付けられたものです。徳川幕府が作成した郷帳と区別するために、本稿では小沢家に伝わった『相模国郷帳』を『小沢相模国郷帳』と記します。なお、この書物については後段でもう少し詳しく紹介します。この『小沢相模国郷帳』中に、関東大震災によつて出現する前の旧相模川橋脚と思われる記述が数か所ありました（同書八四〇八六頁）。その他にも茅ヶ崎に関わる興味深い記述がありますので併せて紹介します。以下、元の文に記載されている注釈は（）、本稿で筆者が追記した注釈は【】とします。

『小沢相模国郷帳』に見る橋杭

西久保村

三百石

丸山権十郎

石川七右衛門

御代官所

細井「造」酒之丞

(脚注) 西久保村寶勝寺【宝生寺】の域に頼朝の墳墓あり其ワキ

西久保にそいて川の流ありし時頼朝卒し給ひぬ よりて其あたりに墓を立と云傳ふ

上大曲村

二百石 本間忠左(ママ)衛門

(脚注) 昔ヨリ八幡の祭六月晦日二行れしむを郷の人ここニ集て六月祓セシヨリ始にいふ 今ハ御祓の八幡と称して神号と思へり川ハ昔今宿ニて海に入りし時うちたる杭木六本今に残りて水のがれたる時ハ木末あらばると云べき所を相模が淵といふ

(脚注下の張紙・脚注の下部に張紙を追加し、そこに次のように記述されている) 「太田善太夫基次の墓 圓蔵村弥陀堂の傍に在 圓

蔵矢端(ママ)西久保あたり馬入に至る迄皆大庭之庄也 一の宮

の庄十三ヶ村を除く 頼朝の墓ハ西久保宝勝(ママ・宝生寺)ニア

リ 十人の殿原の墓ハ濱の郷立善寺(ママ・龍前院)ニ在 姥島一つの名(ナ)ハ笠島也 馬入河原ハ頼朝の世 今宿ニて海に落

今宿ノ内相模力ふちといへる所ニむかしうちたる標零(タイ)

【原文にタイと振つてある。標零・みおつくしのことか?】の木六

本残れり 水かるる時ハ末あらわれて見ゆるといふ 片身の鱸

【すづき・当時の伝説か】此のあたり也 濱の郷鷺生山妙蓮寺(み

ようれんじ・新編相模国風土記稿の濱之郷村の項に「相傳ふ中古妙蓮寺

と云ふ 古刹此像を安せしが、其寺廢して後江戸に傳し…」とあり、鎌倉時代には存在したがその後廃絶したようである。廃絶の時代は不明。】

今宿柳島の間の小村松尾村岡部左衛門丞の御知行地也 馬入新田ハ萩園の後也 戸数六七戸もあるべし 田なし 則平太夫新田也 今宿ハむかしのあそびの地也とて八幡宮の社地にて六月の御祓せし故ミそぎ八幡と云 氏子村 圓蔵 矢畠 今宿 町谷【ママ】

西久保 濱の郷七ヶ村【ママ】也

一之宮氏子村と称するハむかしの社領なるべし

とあります。

江戸時代中期の昔話として、頼朝の時代に馬入川は今宿で海に流れ込んで相模ガ淵というところに濬標の木が、水の涸れる時に六本現れたと書かれていて、これが旧相模川橋脚であった可能性があります。鶴嶺八幡宮の浜降神事を捉え「禊ぎ八幡」と呼ばれていることも納得できます。

この他、もう一か所、橋脚と思われる記述がありますので次に紹介します。(同八六頁)

平太夫新田

二十一石

御代官所

以上五村【今宿村・松尾村・柳島村・中島村・平太夫新田】大庭庄也

此説信しかたし 今の相模川往昔六百年前ニハ濱の郷の西流レテ中島ニて海ニ入りたり其落口今も地をうかては【穿てば】古しヘノ杭猶存す 則チ頼朝の馬逸して海に入たる所也 されバ中島ヨリ西今宿松尾平太夫新田等ハ皆昔の馬入の北也 或ハ大庭の莊川の西に昔有しも知るべからず

要するに、信じがたいが六百年前【千二百年頃】、相模川が浜之郷の西を流れて中島で海に流れ込み、その河口を掘ると今なお、古しえの杭がある。頼朝の馬が逃げて海に入つたところとの言い伝えがあるということです。このように他地区の古文書に橋脚と思われる伝説が書かれていることは当時『小沢相模国郷帳』の作者が茅ヶ崎の村人から聞き取つた内容と思われ、興味深いものがあります。また、『小沢相模国郷帳』の脚注や張り紙に、わざわざ橋杭に関する記述を追記している点から考へると、作者が橋杭に強い関心を抱いていたか、あるいは当該村において橋杭が古くから重要な情報として伝承されていた可能性があると考えられます。

関東大震災で田圃から突如現れた木柱を鎌倉時代、稻毛重成が相模川に架けた橋の橋脚であると断定し、国に保存を働きかけた歴史学者の沼田頼輔博士は、地元である高座郡の前述文書『鷹倉社寺考』や『小沢相模国郷帳』『皇国地村誌』に記載された橋杭のことを知つており、判断の参考にしたのではないかと思われます。しかし、当時沼田博士が書かれた論文『神奈川縣茅崎町出現の古橋柱』【注4】にはこれら稗史【はいし】・民間の歴史や伝承【こと】とは書かれていませんでした。

【引用文献・参考文献】

注1 『鷹倉社寺考』著者金子伊豫守、校訂者小沢彰、海老名市古文書研究会 平成十五年四月二十日編集発行
注2 『相模国郷帳』 神奈川史談第八号 神奈川県立図書館

昭和四十一年三月一日発行
今回参考にした『小沢相模国郷帳』とは、

高座郡海老名町杉久保七四六番地小沢彰氏【鷹倉社寺考】の校訂者【の所蔵で、小沢家重代の蔵書。小沢氏は村岡氏を祖とする遠馬三郎重連の子太郎家重が、伯父小沢重信の遺領を継いで小沢姓を名乗つた。近世小沢氏は代々遠馬郷十二ヶ村の里正【りせい】・庄屋【じょうや】総代を勤めた。本書は六十五丁【葉・枚】であるが前葉六丁、末葉一丁を欠いているため原書名や成立の由来は一切不明。後人が表紙とした板目紙【いためがみ】・和紙を重ねて厚く丈夫にした厚紙】に『相模国郷帳』と墨書きされて

3]

いる。本書は他に原本があり、それを文政十年（一八二七）に書き写されたものと考えられている。原書は領主の姓名から推測して享保十九年（一七三四）～寛政二年（一七四九）頃に書かれたと推測されている。（筆者、同帳より引用）また、徳川幕府の命により作成された「郷帳」は吉川弘文館刊『國史大辭典』5の「郷帳」の項（二）四五〇頁に次のように記されている。

江戸幕府の勘定所が国絵図とともに編集した国ごとの郷帳。郷帳とは郷村高帳の意。江戸幕府は正保六年（一六四四）・元禄九年（一六九六）・天保六年（一六四四）の三度、国ごとにそもそも大名を指定し、国絵図と郷帳を調整するように命じ、それぞれ数年を費やして完成した。（中略）郷帳の内容は村ごとに貢納石高を列記し、郡・国ごとにそれぞれ村数・石高の合計を掲げたもので、その数字は国絵図に書き入れられるるものとほぼ一致する。領知関係の記載は全くない。全国の収納高を明確に把握する財政上の基礎台帳の性格をもつている。（後略）

注³ 「明治十二年皇国地誌村誌」 茅ヶ崎市史史料集 第三集『茅ヶ崎地誌集成』所収 平成十二年三月三十一日 茅ヶ

崎市発行 五五頁

注⁴ 史蹟名勝天然記念物第3集第十号別刷 史蹟名勝天然記念物保存協会編 昭和九年頃出版

○ 『旧相模川橋脚』新日本の遺跡3 大村浩司著 同成社一〇二四年五月三一日発行
及び「郷土ちがさき」前号（164号）に記載した参考文献



いまの言葉で

『大岡越前守忠相日記』を読んでみた△△

野田 穂

古文書と歴史の素人が『大岡越前守忠相日記』の現代語への意訳を試みた、第三回です。今回は、忠相の孫の初節句について書かれている日の日記を読んでみました。

訳文中の（）は注記、＊は補足・補注です。（筆者調べ）

寛保一(一七四一)年二月十五日

(忠相六六歳)

天氣良し、夕方曇り

- ① 八時前 服紗小袖の着物に麻の袴を着て、江戸城へ出勤＊₁
- ② 九時過ぎ 黒書院へ将軍が(八代・吉宗五九歳)お出でになり、紀州藩主の徳川宗直殿(むねなお六代・六一歳)と子息の宗将殿(むねのぶ二三歳)＊₂が水戸藩主の徳川宗翰殿(むねもと五代・十五歳)のいる松の大廊下沿いの「上之間」＊₃に挨拶をしてから黒書院に入り、いつも通り西湖之間＊₄で(吉宗に)謁見して挨拶を申し上げた。また、黒書院で寺社奉行の謁見もあり、因幡守(山名因幡守豊就とよなり・寺社奉行五七歳)が小桜之溜＊₅へ廻った。

③ 今日は西ノ丸で食事付きのお能があったので、右近衛大将・家重様(三一歳)は本丸にはお出でにならなかつた。＊₆

④ 左近殿(松平左近将監秉邑のりさと・老中五七歳)＊₇がおつしやるには、摂津国と丹波国の国境争論については、＊₈昨日、文書で上に報告した通りに決定した。

大阪から届いた現況の絵地図に国境の線引きをして報告。これを大阪へ知らせ、また、摂津国と丹波国々から提出された書類が上より戻らないので、写しをとつて、明日、絵地図とともに上に上げるようにと左近殿がおつしやつた。このことを伊賀守(木下伊賀守信名のぶもり・勘定奉行五六歳?)へ申しつけて絵地図を渡した。＊₉

⑤ これらが済んで十時過ぎに退勤した。

⑥ 十三時 熨斗目の着物に半袴＊₁₀を着て家を出発し、島津山城守久芬(ひさよし四二歳)の家を訪問。今日はお日柄もよ

く、孫の又吉 *11 の七五三（髪置きの儀）*12 と、年始を兼ねてお祝いし、夜二十二時に帰宅した。

⑦ 今月（二月）二十八日は天英院様 *13 の法事なので月次（つきなみ）の御札はなし。これにより、三月一日に月次御札を行うので、このことを通知するようにとの文書が左近殿（老中）より渡されたこと、松波筑後守（大目付 七八歳）*14 が来られたことが、当番の松平伊賀守（松平忠愛 ただぎね 四歳）から届いた。

【大岡日記 原文】（中巻 五三〇頁）

十五日 吉 夕方曇

① 五時前服紗小袖麻上下二而 登城

② 一 五半時過御黒書院江 出御被遊、紀伊国殿御父子水戸殿溜り詰御礼有之、御表江出御之節如例西湖之間御縁類罷出御礼申上候、表ニ而寺社之御礼有之、小桜之溜江 因幡守被廻候

③ 一 今日西丸二而御膳被上御能有之、右大将様二者 御本丸江出御不被遊候

④ 一 左近殿被仰候者、摂丹国境論所之義昨日書付上候通ニ相極候、大坂より参候見分絵図御渡し国境之筋引致し上可申候、大坂江可被遺候并 各々昨日被差出候書付御前より下り不申候間、御

扣ニ 相認メ明日絵図ともニ 上可申由被仰聞、其段伊賀守江申談絵図相渡候

⑤ 一 右済四時過致退出候

⑥ 一 九半時熨斗目半袴三而出宅候而 島津山城守方江 罷越、今日日柄能又吉髪置之祝儀年始之祝儀相祝夜四時帰宅
松波筑州被差越候由当番松平伊賀守ら來候

補足・補注

・西暦は元号に対応。日付は旧暦。年齢は数え年。

*1 月次御札（つきなみおんれい）の日なので、服紗（茶道や貴重品を包む用途等で使われる布）のように空気を含んだ柔らかな絹布

の小袖（袖口を小さく縫ったの着物）に、麻の袴（かみしも）を着て出勤。江戸城では毎月一・十五・二十八日に月次御札という、参勤交代で江戸に滞在している諸大名が江戸城に登城して将軍に謁見する例会が行われていた。

*2 徳川吉宗の將軍就任により、吉宗の従兄弟の徳川宗直が六代紀州藩主になつた。息子の宗将が誕生したのも父の宗直が亡くなつたのも、江戸の紀州徳川家中屋敷（青山御殿。現赤坂御用地内）。

*3 上之間は、徳川御三家（尾張、紀伊、水戸）と親藩大名（徳川一家族）の詰席。この時の水戸殿は五代藩主・徳川宗翰。三歳で

藩主になつたが幼かつたので、常陸太田藩の中山信昌（日記当時四四歳）が附家老の命を受けて養育係をしていた。水戸藩上屋敷は江戸小石川。

*4 黒書院には、周囲を入側（いりがわ）に囲まれた上段、下段、西湖之間、囲炉裏之間の四部屋があつた。

*5 小桜之滙は、松之廊下→白書院→竹之廊下→黒書院と謁見場所に進む順路の、松之廊下突き当たりにある「桜之間」のことか。

*6 吉宗の長男家重は、前年の寛保元（一七四一）年八月、右近衛大将に任命されたが、大奥に入り浸り、猿樂（能）を好んで文武を怠つたと言われている。

*7 松平乗邑（のりやまと）は、大岡忠相とともに享保の改革を支えた老中。吉宗の後継に次男の田安宗武を推していたため、家重が将軍に就任すると老中を解任された。松平定信の実父。

*8 大阪・兵庫・京都周辺の国境をめぐる論争。検地のために国境を明確にする必要があつたが、燃料や肥料が採取される山野の線引きは利権などが絡み困難で、江戸時代中頃から全国的に論争が頻発した。

*9 領主の違つ村同士の争いは、評定所（最高裁判所）へ持ち込まれ、評定所一座（勘定奉行・町奉行・寺社奉行の三奉行、場合により老中）によつて評議され、裁許（判決）が下されて裁許絵図が作成された。日記の頃は、かなり大型の絵図が作成されたと考えられる。（参考資料「大型化した裁許絵図」参照）

*10 スーツ的な服装。腰回りに格子模様などが施された「熨斗目」の小袖の上に、半袴（足首までの長さの袴）の袴を着て出宅。

*11 又吉郎久般（ひさかわ）は、島津山城守久芬（ひさよし）の子で、母は大岡忠相の娘（久芬の後妻。忠相の娘も再婚）。

*12 髪置（は）は、三歳頃に行われていた子どもが髪を伸ばし始める祝いの儀式。誕生後は男女問わず髪を丸剃りして育てられていた。当時、又吉はまだ一歳頃と思われる。（大岡忠相がいた江戸時代の七五三）（参照）

*13 六代将軍・徳川家宣の正室。

*14 松波筑後守正春は、忠相の後任として元文元年（忠相が寺社奉行になつた年）、江戸南町奉行に就任。元文四（一七二九）年大目付に。

【参考資料】

○『大岡越前守忠相日記』上・中・下巻 大岡家文書刊行会編纂／三一書房 一九七二—一九七五年

○『ちがさきと大岡越前守』茅ヶ崎市史ブックレット12／茅ヶ崎市史編集委員会 一〇一〇年

○徳川御三家 紀州徳川家の歴代藩主／名古屋刀剣ワールド
<https://www.meijaku.jp/tokugawagosanke-gosankyo/kisyu-tokugawa-hansyu/>
 ○広大な中屋敷＝居屋敷＝港区デジタル版 <https://adec.jp/minato-city/text-list/dl10021/h000830/>

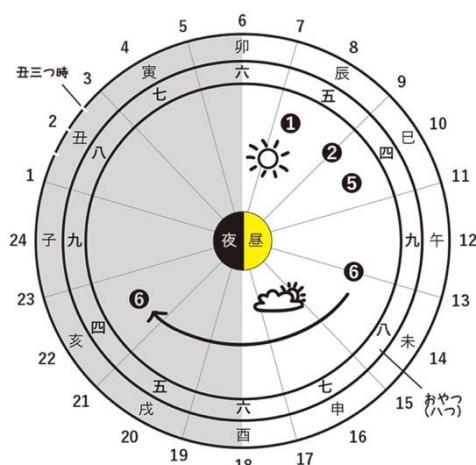
○江戸幕府の年中行事／大江戸歴史散歩を楽しむ会
<https://wako226.exblog.jp/241531250/>
 ○江戸城／大広間／控之間／松之廊下／大江戸歴史散歩を楽しむ会
<https://wako226.exblog.jp/16483689/>

○「くじらまつり」#31／ステップnet・NHK財団
<https://www.steranet.jp/articles/88978>

- 『御本丸御黒櫻院松浦共地絵図』東京都立図書館
https://www.library.metro.tokyo.lg.jp/collection/features/digital_showcase/056/07/index.html
- 『御本丸松之御廊下御二家部屋櫻彌御数奇屋地絵図』東京都立図書館
https://www.library.metro.tokyo.lg.jp/collection/features/digital_showcase/044/05/index.html
- 『田安宗武の能楽愛好：田藩文庫の能楽関係資料を手がかりに』中尾薰／大阪大学学術情報庫OUKA <https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/51653/Philokalia.24.039.pdf>
- 境田のおり・川田／(兵庫県)川田市史だより 1100K年十一月一日 <https://www.city.sanda.lg.jp/material/files/group/16/061101up.pdf>
- 徳川御三家 水戸徳川家の歴代藩主／名古屋刀劍ワールド
<https://www.methaku.jp/tokugawasanke-gosankyo/mito-tokugawa-hansyu/>
- 中江信頼／Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/中江信頼>
- 水戸城関連年表 (近世以降) 水戸城ペーパー／水戸市教育委員会
- 歴代勘定奉行一覧 <https://kitabatake.world.coocan.jp/rekishi40.html>
- 大型化した裁許絵図／神奈川県立歴史博物館 https://ch.kanagawa-museum.jp/monthly_choice/2025_10
- 寛政重修諸家譜 卷第一輯 六六九-六七〇頁 清和源氏 為義流島津／国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1082717/1/344>
- 郷土の歴史上田城／上田市立博物館 一九八八年 一四〇頁
- 『寒川町史1』五八一頁 寒川町 一九九〇年

『大岡忠相がいた江戸時代の七五三』

『大岡日記』の寛保1年1月十五日に、忠相が孫（娘の子）の七五三のお祝いで、娘婿の家に昼の一時に出かけ、夜の十時に帰宅したという記述があります。名奉行と呼ばれた大岡越前守も家では普通のおじいちゃんだった、ということだが、主に公務記録であるはずの日記の、この短い一文から垣間見ることができます。江戸時代の七五三は、現代とは少し様相が違い、民間では挿絵のようないでたちで氏神に参詣しました。また、着物の裾が長いため、父親か出入りの鳶の者などが肩車をして参るのが慣わしだった。（武家の髪置は、参考資料「儀式風俗図絵」金沢大学附属図書館 参照）



子供の成長を祝う七五三は、平安時代から室町時代にかけて成り立した、三歳前後の「髪置（かみおき）」、五歳前後の「袴着（はか



まぎ）（または着袴）、七歳前後の「帯解（おびとき）」（または紐解、帯直）が由来で、江戸時代に武家を中心に祝われるようになり、関東から全国に広がったと言われています。髪置は、それまで剃りあげていた子どもの髪を伸ばし始める儀式です。もともとはどの年齢も男女の区別なく行われていました。また、五代将軍綱吉が長男徳松の健康祈願を十一月十五日に祝つたことから、この日に定まつたという説もあり、当時の風俗を描いた本には必ず一月の項に載っています。ところが、大岡日記では一月十五に正月祝いを兼ねて、しかも一歳前後の早期に行われています。家族の状況などに応じて臨機応変に行われたのかもしれません。

なお、茅ヶ崎駅南口にある、明治三十七（一九〇四）年創業のフォトグラフィックオオイ（旧大井写真館）の大井氏に尋ねたところ、近年は、三歳のお祝いに記念写真を撮る男児も多いとのこと。九州などには男女とも三歳のお祝いをする地域があるそうです。「恵方巻き」のように、西から来た風習が関東に定着（二の場合は復活）する現象が起きているのでしょうか。

【参考資料】

- 初づくし 初にまつわる 江戸時代の行事・風習／国立公文書館
- 『子どもの着物大全』 一三〇頁 似内惠子／誠文堂新光社 二〇一八年
- 『原色浮世絵大百科事典』 第五卷 百一十九頁 日本浮世絵協会原色浮世絵大百科事典編集委員会 編／大修館書店一九八〇

茅ヶ崎郷土会の事業報告

第三回 史跡・文化財めぐり

三島市に山中城跡を訪ねる

平野文明

日時 令和七年十月十一日(土) 参加者 八名

はじめに

茅ヶ崎郷土会としては久しぶりの県外探訪でした。下見を行い、事前学習会を済ませて迎えた本番の日は、実行か中止かを迷う小ぬか雨が朝から降っていました。その時間で中止の連絡を回すわけにもいかず、来てるかなあと茅ヶ崎駅に行つてみると、七人の勇士が雨傘片手に集まっていました。

熱海駅で乗り換えて三島駅まで、そこから東海バスの乗り降りフリー「三島1日券みしまるきっぷ」(一五〇〇円)を買って城跡を訪ねました。このきっぷ、ほんの少し割引でした。

城跡は三島市の「山中城跡公園」としてすばらしく整備されています。とても広いです。コースに沿えば全体を訪ねることができ、各所に設置されている説明板を読みながら進むと城の特徴が理解できるようになっていました。以下の文章はその説明板を元にしています。



山中城とは

小田原北條氏が、永禄年間(一五六〇年代)に小田原防備のために創築。

天正十七(一五八九)年、

豊臣秀吉の小田原征伐に備え、西ノ丸や岱崎出丸

(だいさきでまる)などの

増築が始まり、翌年の三月、豊臣軍に包囲され、

約一七倍の人数に半日で

落城したと伝えられる。後世、この戦いで戦死し

た北條方の松田康長、間宮康俊の墓などと、攻め

る豊臣軍で戦死した一柳直末の墓が三ノ丸跡の宋閑寺境内に設けられている。

三島市では昭和四十八年度からすべての曲輪(くるわ)の全面発掘調査を行い、その資料に基づいて整備事業に着手した。その結果、戦国時代末期の北條氏流の築城法が解明され、規模・構造が明らかになった。特に堀、土壠(じるい)、尾根を区切る曲輪の構築法、架け橋や土橋の配置、曲輪間の連絡道など、地形を巧み

国指定史跡 山中城跡案内図

(現地にある三島市教育委員会設置の案内板から作成 茅ヶ崎郷土会)



に取り入れた縄張り（城の設計や城内の各しつらえの配置）と空堀（からぼり）、水堀、用水池、井戸の設置など、石材を使わない山城の最末期の姿を留めている。

箱根旧街道

慶長六（一六〇二）年、徳川家康は東海道に宿駅伝馬制を設けた。これにより東海道の整備が始まり、人馬の利用も増えた。山中城は東海道（箱根八里。小田原～三島間三三km）の箱根関所から七km、三島から八kmに位置している。街道には通行の人馬を保護するためには松や杉の並木、一里塚が作られ、ローム層の滑りやすさ対応のために延宝八（一六八〇）年に石畳が敷かれた。三島市は平成六年に、荒れていた石畳を山中城跡の近くの三五〇mを整備した。

① 山中城跡広場（バス停・トイレ・売店）

以上のことを見入って、小雨降るなか、城跡内をくまなく回った八人の侍でした。

城跡への入場口の、「山中城バス停」の辺りに三ノ丸曲輪があつた。城跡のこの部分は整備されていないために曲輪の形状は把握しにくい。当日雨降りのために城址での昼食がかなわず、一巡してから売店に寄つて暖かい蕎麦などを食べた。

② 三ノ丸堀（城跡への進入路）

城跡への入り口から田尻の池・箱井戸へ向かつて、長さ約一八〇メートル、深さは約八メートルの大きな堀が直線状に延びている。この堀は自然の谷を利用して、中央に敵（うね）を設け、この敵を道とし、

敵の両脇に堀がある。敵（道）の東側の堀は水路（田尻の池・箱井戸の排水路）、西側は空堀。

③ 田尻の池

田尻の池と箱井戸が並んである。元は一面の低湿地だったが、築城時に土壠を設け、池と井戸に分けたのだそうである。また、田尻の池に向かつてその左側は「馬舎（うまや）」と呼ばれていたので馬の飲料水などに使われたと推定されるとのこと。

④ 箱井戸

山城では飲用水の確保が生死を分ける。田尻の池より比高が高く、水は池に流れている。箱井戸の水は飲料水とされていたのだろうと説明板に書いてあつた。

⑤ 二ノ丸曲輪（曲輪とは城跡内に設けられた平地）

説明板には二ノ丸を「北條丸」とも記してあつた。

田尻の池・箱井戸から道を登ると二ノ丸に至る。登り切つた所に虎口（ごくち 城内の曲輪などへの入口）がある。虎口の正面土壠は大きく、高さ四・五メートル。この土壠に突き当たり、右折して曲輪に入るようになつていて。二ノ丸は城内最大の曲輪。後に述べる本丸が狭いのでその機能を分担したと考えられている。

⑥ 元西櫓

二ノ丸曲輪の西に位置する。周囲を深い空堀で囲まれて六四〇m²の小さな曲輪。豊臣軍の侵攻前はこの曲輪が城の最西端だった。侵攻される直前に、縄張りをさらに西側に拡張したので「元西櫓」



山中城の障子堀

と命名された。現在、この位置から西ノ丸⑧に向かうには一旦堀底まで下りることになる。堀底を右に進むと溜池⑫があるが、私たちは西ノ丸に登った。

⑧ 西ノ丸

西ノ丸は三四〇〇m²の広い曲輪で、山中城の西方防備の拠点。その西端に見張台（物見櫓）がある。曲輪の三方は、他の曲輪と同じく土墨（どるい）で囲まれている。石垣が使われる前の戦国時代の城は堀と土墨で守られていた。曲輪を土墨で囲むと、その外側（敵側）から曲

輪の中が見えにくくなっている。

土墨の内側全体は東へ傾斜している。雨水を集めて、西ノ丸の東下にある溜池⑫-2に流すためである。自然の地形を利用した北條流の築城技術と説明板にあつた。

西ノ丸に限らずいくつかの曲輪に見張台が設けられている。西ノ丸見張台の標高は五八〇メートルで、他の曲輪を見渡せる。見張台は連絡・通報上の重要な拠点だった。

⑨ 西ノ丸の周りの敵堀（うねぼり）と障子堀（しょうじぼり）

西ノ丸から降りて、南側の敵堀⑨を見ながら西櫓⑩に向かった。西ノ丸は山中城の西側防備の拠点だった。西ノ丸の周りには深く大規模の空堀が設けられている。西ノ丸⑧と西櫓⑩との間にある空堀は、堀底の中央に南北に幅広の敵をしつらえ、その敵から両側に直角に敵を等間隔に設けてある。全体は障子の棟のように見えるので障子堀と呼ばれる。北條氏の築城技術のように言われるが戦国時代の他の城にも見られるのだそうである。言葉での説明は分かりにくいだろうが、障子堀の中央の幅広の敵を省いた堀を敵堀（うねぼり）というのである。

西ノ丸曲輪の南側と北側、及び西櫓⑩の周りには敵堀が見られる。このように西ノ丸・西櫓の両曲輪を取り囲むように障子堀と敵堀が設けられているのは徹底的に敵の進入を防ぐためであった。南側の敵の高さは堀底から約二メートルあり、曲輪までよじ登るにはさらに九メートルだそうである。土質はローム層で、濡れると滑りやすくなることも計算されていた。よじ登る敵を曲輪内から狙い撃ちしたのだろう。

なお、敵の上辺は人が歩ける幅があるよう見えるが、これは遺跡保存のために土で覆つてあるためで、実物の幅は三〇センチほどらしい。

⑩ 西櫓（馬出＝うまだし）

先にも述べたが曲輪への出入り口を虎口（ごくぐち）という。曲輪には馬出というしつらえを備えている場合がある。西櫓は西ノ

丸⑧の馬出だつた。虎口は敵が侵入しやすい場所でもあるので、その先に馬出を設けたのである。西ノ丸と馬出しである西櫓は架け橋で結ばれていた。

敵は虎口を破ろうとするとき馬出に集まる。城方はそれを虎口の内側から狙い撃ちするのである。また城方が出撃するときも馬出を通つて曲輪の外に出る。山中城の馬出は上から見た形は四角で「角馬出（かくうまだし）」と呼ばれている。甲斐の武田氏の馬出は半円形だつたそうである。

西ノ丸⑧と西櫓⑩の間には巨大な堀があり、堀底は障子堀になつてゐる。西櫓ではその外側を取り囲む帶曲輪⑪との間に出入りのための土橋（南側）と木橋（北側）が設けられていたそうである。

豊臣軍の侵攻のときは、この付近と、岱崎出丸（だいさきでまる）のすり鉢曲輪⑫のあたりで激しい戦闘が行われたそうである。

山中城跡は全面発掘されたが建物の遺構は見つかっていないと。いう。閉城後の耕作で攪乱されたか、また、あつたにしても小屋程度のものだつたと考えられている。しかし、西櫓⑩には三×二・六メートルの範囲に柱穴が一〇、元西櫓⑦には五・四×七メートルの範囲に柱穴が見つかっている。いずれも掘立柱で茅葺の物置程度の建物があつたと考えられている。寝小屋（ねごや）は城の外につたと考えられている。

⑪ 帯曲輪

西櫓⑩をぐるりと取り巻いている。帯曲輪の一部に西木戸⑫がある。また来訪者のための休憩所が設けられている。トイレは使用禁止になつていて。広い城跡にトイレが限られているというのは困つたものだ。

⑫ 西木戸

南北方向に駿河湾・沼津市・三島市、北西方向に愛鷹山・富士山が見える。しかし下見でも本番でも悪天候で見えなかつた。残念。

⑬ 潟池

休憩所を発ち、西ノ丸⑧の東側の山林の中の細道を下ると溜池と称する所があるのである。この溜池に、西ノ丸⑧や元西櫓⑦の雨水などを導いて溜めたのだそうだ。今は水は無いが、発掘調査で池底を四メートルほど掘つたが地盤に達しなかつたと説明板にある。山城では水は命の水だつた。

⑭ 西ノ丸・西櫓・二ノ丸・本丸の北側を廻り林の中を北ノ丸へ

細道だが道の脇には深い堀が設けられている。

⑮ 北ノ丸

標高五八三メートル。天守櫓（てんしゅやぐら）に次ぐ城跡第一の高地に位置する。面積は一九一〇m²。曲輪の重要度は天守櫓に最も高い曲輪にあると説明板にあつた。北ノ丸は堀を作るために掘つた土を尾根上に盛土して平坦面（曲輪）を作つてあるそうだ。本丸側に空堀、他の三方は土塁で囲まれている。

⑯ 本丸

北ノ丸の南側に空堀を挟んで本丸がある。その堀には木製の「本丸北橋」が架かつて両者をつないでいる。木製の橋は簡単に破壊できるので敵が来たとき素早く撤去できる利点があるのである。また来訪者のための休憩所が設けられている。トイレは使

本丸の曲輪は標高五七八メートル、面積一七四〇m²。一画に天守台（天守櫓）が設けられ、山中城の中心だつた。堅固な土塁と深い堀に囲まれている。虎口は南側にあつた。現在藤棚がある所は江

戸時代の絵図に「本丸広間」とある所らしいが、それが何だったのかは説明板に書かれていない。

本丸の端に天守櫓跡がある。標高五八六メートルの、山中城最高の地点そうだ。天守の立つ基壇を「天守台」という。一边が七・五メートルの方形で、五〇×七〇センチ盛土して作られている。天守台の上には井楼（せいろう）（高櫓・物見やぐら）が建てられていたと推定される。そなたが柱穴は確認できていないそうである。

本丸の南側は二段の段差を越えて弾薬庫・兵糧庫¹⁷に続いている。

⑯ 弾薬庫・兵糧庫跡

本丸曲輪の南側に、段差二メートルの平地を挟んで「弾薬庫跡」・「兵糧庫跡」と呼ばれている平地がある。

兵糧庫跡に約二〇個、直径五〇センチの柱穴が見つかった。六・七メートル・七メートルの建物があつたらしい。

兵糧庫あとには建物が復元されていて、休憩所となっている。

⑰ 駒形諏訪神社（矢立杉・大樺の切株）

神社は山中新田集落の鎮守。境内にある神社の説明板に、「祭神は建御名方命（諏訪神社）と日本武命（ママ駒形神社）で山中城の本丸に守護神として祀られた（中略）、（集落は）落城のあと人々移住し箱根山の往還の宿場として栄えた」とあるが、今、祭られている祭神は神仏分離令の後に定められたものと思われる。

境内には天然記念物指定の矢立の杉（市指定）と大カシ（アカガシ県指定）があつたが、大カシは平成三十年九月の台風で倒れた。矢立の杉は本丸¹⁵の天守台のそばにあり、「呼称の由来は出陣の

際に杉に矢を射て勝敗を占つた。『豆州志稿』に依る」と説明板にある。

また、境内には八坂神社の石祠、鳥居脇に貞享四年（一六八七）銘の庚申塔がある。

鳥居脇から旧国道（箱根八里）に出て岱崎出丸（だいさきである）²²を目指した。

⑲ 三ノ丸跡（宋閑寺）

旧国道に沿う宋閑寺・芝切地蔵堂²¹・売店とその向かい側の広場^①辺りが三ノ丸曲輪だったと思われるが、「城跡案内図」には示されていない。

⑳ 宋閑寺・北條方豊臣方武将の墓

宋閑寺は現在無住寺院のようだが、説明板に「東月山普光院宋閑寺（淨土宗）は静岡市の華陽院の末寺。開山は了的上人、開基は間宮豊前守康俊の女お久の方と伝えられている」とある。

宋閑寺の境内に立つ説明板に「落城の際 北條軍・豊臣軍の武将たちの石碑がある。北條方は豊前守康俊（普光院殿武月宋閑潔公大居士）兄弟とその一族、城主間宮右兵衛太夫（山中院松屋玄竹大居士）、群馬県箕輪城主多米出羽守平長定らの墓と、豊臣軍はその先鋒一柳伊豆守直末（大通院殿天叟長運大禪定門）の墓碑が並んでいる」と書かれている。北條方は三基の小型五輪塔とその前に並ぶ三基の自然石、豊臣方は角柱のものがそれである。

㉑ 芝切地蔵堂（木食僧唯念の供養塔とその他の石仏がある）

旧国道の北側、一段高い所にある。お堂の入り口に立つ説明板に「昔、新田（山中新田）の旅籠に泊つた巡礼が急病のためこの地で亡くなつた。間際に、自分を地蔵として祭り、故郷の常陸が見えるように芝塚を作つて貰いたい。村人の健康を守りましよう



と言い残した。村では七月一日を縁日とし、作った小麦まんじゅうが評判となり、沼津方面から多くの参拝が来た。その売り上げで新田の一年間の費用が間に合った」と書かれている。

お堂入り口横に木食行者唯念（ゆいねん）の六字名号塔がある。塔の表面中央に独特的の書体で「南無阿弥陀仏」、その両脇に「敬神愛國 天理人道」／「皇上奉戴・朝旨尊守」と三条の教則（明治五年）が彫つてある。裏面には短歌らしいものと「明治九年（一八七六）七月日／宋閑寺十九世／〔〕／发起／〔〕／本町石工／北原 七（□は読めない文字）」とある。また、西国坂東秩父觀音靈場巡拝碑（紀年銘未調査）などもある。

㉒ 岱崎出丸（だいさきでまる）
バス停のある広場①から南に進むと岱崎出丸である。「出丸」は「出曲輪（でくるわ）」とも言われ、本城から突き出して作られた曲輪のこと。豊臣軍の小田原侵攻に備え、天正十七年（一五八九）に急速作られている。三島方面から来る豊臣軍に最初に対峙する位置にある。二〇・四〇〇m²の広さがあり、内部に御馬場曲輪とすり鉢曲輪が設けられ、街道を通つて来る敵を防ぐために直線状の一ノ堀②がしつらえてある。曲輪には建物の跡は見られない

いそうである。南端の土壘上から三島・田方平野を見渡すことができる。押し寄せる豊臣軍が遠方にあつても確認できたと思われる。豊臣軍の中に中村一氏が一隊を率いており、その中に居た渡辺勘兵衛（号は睡庵）という武将が『渡辺勘兵衛武功覚書』を残している。これに山中城攻めの一節があり、勘兵衛が城への一番乗りを果たし、落城への糸口を作つたと書かれているそうである。

㉓ 御馬場曲輪（現休憩所とすり鉢曲輪）

岱崎出丸のほとんどを占めている曲輪。現在その中に休憩所が設けられている。休憩所の北側に御馬場堀があり、岱崎出丸を南北に切る堀かと思われるが、詳しくは分からぬ。

㉔ すり鉢曲輪

岱崎曲輪の南の先端部にある。普通の曲輪は掘削、埋め土で平たくんに作られるが、この曲輪は中央部をくぼませて、周辺になるほど緩やかに立ち上がるすり鉢状である。その縁は土壘の頂部に連続している。虎口は南にある。説明板を読んでもこの変わった形の理由は分からなかつた。

㉕ 一ノ堀の敵堀

箱根街道に沿つて敵堀が直線状に設けられている。調査時には一五〇メートルの間に一七の敵が確認されたと説明板にある。その形状は見るものを圧倒する。

豊臣軍の山中城攻めは、岱崎出丸と西ノ丸⑧・西櫓⑩に集中したと説明板に記してある。

最後に

一時止むときもありましたが、しどしと雨の落ちる中の城歩きでした。無事に終了し、再びフリー切符で三島まで帰り、三島神

社で会員の無事平安を神様に約束していただき、男女組それぞれ慰労会を行い、にも拘わらずどうしたことか同じ電車に乗り合

わせ、相互の結びつきは切れないものだな」と思いながら茅ヶ崎に帰着したものでした。

第三二五回 史跡・文化財めぐり報告

大磯・鳴立庵から東海道を平塚に向かう

山本俊雄

日時 令和七年十二月十三日（土） 参加者 一五名

令和七年度の三回目の史跡めぐりは「市内の東海道を歩く」の番外編として大磯の東側から平塚に向かうコースでした。ルートは茅ヶ崎駅からJR東海道線を下り、大磯駅から西側に向かい鳴立庵に寄った後、東海道を東に向かい「三沢橋東側」の信号から旧東海道に入り、松並木を通って化粧坂に出た後、高来神社に至る道です。平野会長は病明けで参加できなかつたのですが、解説は木村会員と私に加え、加藤会員と丸ごと博物館の会から強力な助つ人で大磯に詳しいH氏が担当しました。

茅ヶ崎駅改札前の集合場所に行きますと、加藤さんのグループ、前原さんや野田さんの主婦友グループ、石川さんご夫妻の顔が見えます。定刻を過ぎ改札内に入り木村さん、染谷さんと合流し大磯に向かいます。午前中は凍えるほど寒かったです、お昼からは陽がさし、暖かい日でした。

大磯駅に着くと、駅前の通行の妨げにならない場所で熊沢事務局長が挨拶をされました。

最初に見学を予定した澤田美喜記念館は金・土曜日の十時からの開館だったので、本日は入館できません、と謝りとお断りをしました。

記念館の前に移動したところでH氏が、大磯についての概略と駅前にある三人の石像物について、線路沿いにある統監道（とうかんみち）が別荘地の住人などで造られたこと、この記念館の小山の辺りから東に下った小学校の手前までが三菱財閥の大磯別荘だつたこと、敗戦後の財閥解体でこの土地も一旦は手放されたのを岩崎弥太郎の孫の澤田美喜が一部を買戻し教育活動を開始したこと、及び大磯に別荘を構えた政財界の大物の中から八人の首相を出していること等を分かりやすく説明されました。次の鳴立庵に向かう途中でも、大磯が台地の上なので水を確保できる三名水があることなども教えてもらいました。

澤田美喜記念館 大磯一一五一

混血孤児教育に情熱を傾けた澤田美喜氏は隠れキリストンの遺物の収集家としても知られています。記念館には、殉教者の歴史を語る貴重な資料八四七点が展示されています。澤田美喜氏は三菱財閥を起こした岩崎弥太郎の孫です。敗戦後、三菱財閥は解体

され、大磯駅前の別荘地も人手に渡つていただきましたが資金を集め、ここにエリザベス・サンダース・ホームを建設し混血孤児教育を始めました。

鳴立庵 大磯一二八九

澤田美喜記念館から道なりに東海道（国道一号）に出ると、ほぼ突き当たりに鳴立庵があります。西行法師の歌で名高い鳴立沢に寛文四（一六六四）年小田原の崇雪が草庵を結んだのが始まりで、元禄八（一六九五）年、俳人の大淀三千風（おおよどみちかぜ）江戸時代初期の俳人）が入庵し、第一世庵主となりました。現在は京都の落柿舎 滋賀の無名庵とともに日本三天俳諧道場の一つと言われています。

新古今和歌集には「三夕（さんせき）」といわれている次の三首の和歌が収められています
心なき身にもあわれは知られけり鳴立沢の秋の夕暮れ

西行法師

さびしさはその色としもなかりけり楓立つ山の秋の夕暮れ
見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苔屋の秋の夕暮れ

藤原定家

鳴立庵は、三夕の一つに「鳴立沢」を読み込んだ西行法師にゆかりのある地と言っています。

また、庵内には出家前の一九歳の虎御前の木像が安置された法虎堂もあるそうです。

ここで、木村さんが西行について説明されました。また、加藤さんが鳴立沢は、「死木立つ」に通じ、卒塔婆のようなものが立つ寂しい所だったという説もると話されました。

崇雪が、自分の故郷である中国の湖南省の洞庭湖とこの地の風景が似ているとしてこの地を湘南と呼んだ。そのことから敷地内に「著盡湘南清絶地」の文字を刻む石碑が建ち、銘文中に「湘南」とあることからこの地が湘南と呼ばれるようになり、「湘南發祥之地」とも言われているという説明がありました。

さらに西隣りの通路の奥、海のそばには海軍大将樺山資紀（かばやますけのり）の別荘地があつたので、孫の白洲正子は当然ここに来ていたはずです、とH氏が話されました。
以上で鳴立庵を離れ東に向かいます。旧道の出口付近に、石碑が二つ道を挟んで立っています。



鳴立庵の入口

新島襄終焉の地・大磯照ヶ崎海水浴場の碑

旧道と東海道の角地にあるのが新島襄のものです。新島襄は政治の教育家として知られ同志社を創立しました。大磯町の旅館百

足屋の一室で四七歳の生涯を閉じています。徳富蘇峰の筆による碑がかつての百足屋の玄関の一部だったところに建っています。道の反対側に、初代陸軍軍医総監を務めた松本順（まつもとじゅん）が大磯に日本で初めて開いた海水浴場の碑があります。松本順は江戸時代末期には松本良順と言い、緒方洪庵亡き後の幕府西洋医学所頭取、将軍侍医、幕府陸軍軍医などを務めた後、明治になつて「順」に改名、日本の医学の発展に大きく貢献し、牛乳を飲むことや海水浴を日本に定着させた人物と言われています。H氏は、海水浴といつても泳ぐではなく、棒のような物につけまり海につかるだけであつた、と話されました。

尾上本陣・小島本陣跡

大磯町には本陣が三ヶ所ありました。地福寺入口のところに尾上本陣、お寺山門前の東向かいに小島本陣がありました。

地福寺 大磯一一三五

承和四（八三七）年の創建と伝える真言宗東寺派のお寺で、山号は船着山円如院。境内には、「破戒」や「夜明け前」など多くの名作を残した文豪島崎藤村の墓があります。梅の古木に囲まれて静かに眠るその傍らには妻静子さんの墓もあります。墓碑は谷口吉郎博士の設計です。谷口博士は東宮御所を設計のほか明治村を開村し初代館長、帝劇や藤村記念堂、記念館など多数設計しています。

延台寺と虎御石 大磯一〇五四

舞の名手虎御前と曾我兄弟の伝説は鎌倉時代の大磯を代表するものです。虎御石は工藤祐経が曾我十郎を返り討ちにしようとした折に、十郎の身代わりとなつて矢や刀を受けた石と伝えられ、現在、当寺に所蔵されています。

虎御前は高麗山の北西麓にあつた山下長者の娘と言われ、子に恵まれなかつた山下長者夫妻が虎池弁才天に祈つた結果、寅年の寅日の寅の刻に授かつた娘なので三虎御前と名付け可愛がつたといわれています。

旧東海道松並木と化粧井戸

源頼朝が鎌倉に幕府を開いて以来、鎌倉と京都を結ぶ道は上洛道として発展しました。鎌倉時代の大磯の中心は化粧坂（けわいざか）の付近にあつたと思われます。曾我兄弟の兄十郎祐成との悲哀物語で知られる虎御前もこの近くに住み、朝夕この井戸の水を汲んで化粧をしていましたことからこの名がついたと言われています。虎御前は、曾我兄弟が仇討ちを成功させ十郎祐成が討ち死にしたと聞くと出家し、供養のために各地を巡り、信濃の善光寺に向かったと言われています。



「虎が雨」は曾我十郎が亡くなつた旧暦五月二十八日に降る雨で、虎御前の涙雨に由来するとされています。また、「曾我の雨」、「虎が涙」も含め俳句では夏の季語となつています。

この日のまち歩きに参加した皆さんには静かな松並木を堪能しながら歩かれました。化粧坂のバス停手前に雰囲気の良い蕎麦屋があつて入つてみたいという人もおられたのですが、この先の高来神社で解散なのでそのまま先に進みました。

高来神社（たかくじんじや） 大磯町高麗一九一四七

戦乱により資料が消失したため起源は明らかではないが、神武天皇の時代の創建といわれているそうです。かつては高麗山の山頂に上宮があつて高麗權現社といい、右の峰に白山權現を、左の峰に毘沙門天を勧請して「高麗三社權現」と称していました。

【補足】慶覚院 大磯町高麗一九一四八

慶長十八（一六一三）年創建。高麗寺の末寺でしたが、神仏分離により高麗寺が廃された後、この寺に千手觀音、地藏菩薩坐像等が移されました。その後明治十三（一八九〇）年の大火により、現在の地に移りました。

虎御前は、この寺で出家して生涯を曾我十郎祐成の鎮魂に捧げたそうです。

本殿裏手から高麗山に登る登山口があります。参加者の何人かは登りたいと言つておられました。大磯めぐりは無事に終了しました。花水バス停より平塚に向かいました。神社手前にある慶覚院は各々の見学としました。



この神社は古来、武門の信仰が篤く、源頼朝が政子の安産祈願をし、後北条氏が領地を寄進した文献があると言います。

〈引用・参考資料〉

- ・「大磯歴史と味の散歩道」コースガイドマップ

「大磯・鳴立庵から東海道を平塚に向かう」に参加して

歌舞伎に現れる大磯、さらに茅ヶ崎

井出康夫

昨年十二月十四日(土)の史跡文化財めぐりでは、大磯の鳴立庵から平塚方面に東海道を進み、虎御石、化粧坂などを巡りました。事前に加藤会員から、虎御石や化粧坂は仇討ちで有名な曾我兄弟の歌舞伎狂言に関わりが深く、街歩きの格好の材料であるとのご示唆をいただきました。歌舞伎が映画「国宝」の大ヒットで多くの方に注目されています。今回の大磯街歩きを機に調べたことを紹介いたします。

曾我の仇討ちと『曾我物語』

曾我の仇討ちは、十二世紀後半の頼朝天下草創のころ伊豆の所領をめぐり伊東祐親(いとうすけちか)と工藤祐経(くどうすけつね)が争い、工藤祐経により河津祐通(かわづすけみち、伊東祐親の長子)が討たれたことに端を発します。河津祐通の遺児である曾我十郎・五郎の兄弟は、頼朝の重臣として富士野(富士宮市)での巻狩に従う祐経を仇として討ちましたが、十郎は討死にし、五郎は捕縛され処刑されました。

この事件は鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡(あづまかがみ)』にも記され、十三～十四世紀には軍記物『曾我物語』となり、兄弟の忍苦に満ちた生涯に加え、その母や十郎の恋人「大磯宿の遊女虎御前(とらごぜん)」の悲哀物語が描かれました。

街歩きでは澤田美喜記念館を経て、鳴立庵から東海道(国道一号線沿い)に、尾上本陣・小島本陣跡、島崎藤村の墓(真言宗地福寺)などを巡り、日蓮宗延台寺を訪れました。

虎御石(とらごいし)と化粧坂 (けわいざか)

虎御前は十郎の死後、出家し諸国の靈場を巡りながら兄弟の菩提を弔い、信州の善光寺で二人の遺骨を納めた後、大磯に庵を結び供養に明け暮れる日々を過ごしましたとされています。全国を巡った虎御前の伝説は日本各地にあるようです。



代わりとなつて矢や刀を受けたとされています。虎御前の深い想いが十郎を助けたということでしょうか。

延台寺から旧東海道松並木を進むと化粧坂が現れます。鎌倉時代の大磯の中心はこのあたりとされ遊郭もあつたようです。虎御前が化粧に使つたと伝わる化粧井戸があり、化粧坂と呼ばれたそうです。

曾我物と『壽曾我対面(ことぶきそがのたいめん)』

曾我の仇討ちは、能や淨瑠璃、歌舞伎などで演じられ曾我物として人気を博しました。特に歌舞伎では、仇討ちを成就した曾我兄弟がヒーローになつたことに加え、江戸庶民の憧れのスター市川團十郎が曾我五郎を荒事(あらざと)として代々演じたことから、曾我物の芝居は一年の安寧を祈る初春の吉例となりました。

荒事とは超人的な力をもつ正義の武将などを勇猛に演じるもので、大庭御厨を拓いた鎌倉権五郎はその代表格です。

曾我物の代表的な演目『壽曾我対面』では、富士野での巻狩の奉行に任じられた工藤祐経が、傾城(遊女)の「大磯の虎」と「化粧坂少将(けわいざかしょう)」を伴い祝宴を開きます。大磯の虎は曾我十郎の、化粧坂少将は曾我五郎の恋人とされていて、虎御前の伝説がもとにあるようです。曾我兄弟は祝宴の場に現れ祐経と対面、仇を討とうとしますが、祐経は「時節を待て」と制し、巻狩の狩場の通行切手を与えて仇討ちの機会を約束します。仇討ちをなしとげる兄弟をヒーローとするだけでなく、仇の祐経も正々堂々とした人物として描き、華やぐ舞台全体が江戸っ子から大きな喝さいを浴びたようです。

曾我物は現在も、初春公演のほか、襲名披露公演、五月恒例の團菊祭(九代目團十郎と五代目尾上菊五郎の功績を称える公演)などで、祝祭劇として度々上演されています。

『外郎売(ういらうり)』と市川團十郎

『壽曾我対面』と同様の人物が勢ぞろいする芝居に『外郎売』があります。遠くに富士山を望む大磯の廓で、工藤祐経が傾城の大磯の虎、化粧坂少将を従え休息しているところへ、小田原名物の外郎売がやって来ます。祐経に所望され、外郎売は妙薬の外郎の故事來歴や効能について早口で言い立てます。実は外郎売の正体は曾我五郎で、祐経への仇討ちの機会を狙います。五郎の早口の台詞が聴きどころで、アナウンサーの研鑽にも使われているようです。

『外郎売』は、成田屋・市川團十郎家の「歌舞伎十八番」の一つになつています。歌舞伎十八番には、江戸の侠客の助六(すけろく、実は曾我五郎)と白酒売(実は曾我十郎)、兄弟の母が登場する『助六』、曾我五郎の初夢に曾我十郎が現れる『矢の根(やのね)』もあり、三つが曾我物となつています。

江戸時代から続く歌舞伎十八番でしたが、上演されなくなつたものもあり、これを明治以降に復活させたのが、茅ヶ崎に居を構えた九代目團十郎と婿養子市川三升(贈十代目團十郎、銀行員から歌舞伎俳優)、二代目市川左團次(小山内薰とともに築地小劇場を設立)です。

鳴立沢と『白波五人男(しらなみごにんおとこ)』

最初に訪れた鳴立庵は、西行法師の歌で詠まれている鳴立沢に、小田原の俳人の崇雪が草庵を結んだのが始まりとされています。確かなことは定かではありませんが、崇雪は小田原外郎家の出との伝聞もあり、『外郎壳』との関わりが感じられるのが面白いところです。

この鳴立沢は、弁天小僧菊之助の台詞「知らざあ言つて聞かせやしそう」で有名な『白波五人男』にも登場します。弁天小僧の兄貴分南郷力丸は「……潮風荒き『小ゆるぎ』の磯馴（そな）れの松の曲りなり……罪科（つみとが）はその身に重き『虎ヶ石』」……覚悟は予（かね）て『鳴立沢』……念佛嫌えな南郷力丸」と心地よい七五調で名乗ります。「小ゆるぎ（小余綾）の磯」は万葉集以来の歌枕で、旧余綾郡（よろきぐん）の大磯から国府津にかけての海浜のことです。力丸が大磯界隈の悪童であつたことをうかがわせます。

弁天小僧菊之助は、九代目團十郎と並び称された五代目菊五郎、茅ヶ崎の九代目のもとで稽古に励んだ六代目菊五郎の当たり役です。「念佛嫌え」と名乗る南郷力丸ですが、南湖の淨土宗西運寺には、力丸を供養したと言われている石像が祀られています。『白波五人男』には茅ヶ崎の潮風も漂い、力丸は茅ヶ崎、大磯、小田原をまたにかけて悪事を働いていたのでは、と想像が広がります。

今回の「大磯・鳴立庵から東海道を平塚に向かう」道程は、寒空の下での高来神社に至る短いものでしたが、名だたる歌舞伎狂

言にも登場し、九代目團十郎など茅ヶ崎も想起させる興味尽きない街歩きでした。

【参考文献】

- 一 「曾我物語」「曾我物」日本大百科全書、小学館、一九九四年
- 二 山本俊雄「大磯・鳴立庵から東海道を平塚に向かう」茅ヶ崎郷土会史跡文化財めぐり資料、二〇二五年十二月
- 三 「御靈石 虎御石」延台寺公式サイト、二〇二〇年
- 四 『壽曾我対面』『白波五人男』歌舞伎演目案内、松竹、二〇二五年参照
- 五 十三代目市川團十郎白猿襲名披露公演『外郎壳』『助六』『矢の根』歌舞伎公式サイト 歌舞伎美人（かぶきびと）、松竹、二〇一三年十一月
- 六 「歌舞伎十八番」改訂新版 世界大百科事典、平凡社、二〇〇七年
- 七 土井浩「湘南」はどこか 有鄰三八九号、二〇〇〇年四月
- 八 「かながわの歌枕」神奈川県立図書館HP、二〇二五年参照
- 九 小風秀雅『九代目團十郎と茅ヶ崎』茅ヶ崎市、二〇二〇年
- 十 茅ヶ崎市文化資料館『茅ヶ崎の石仏2茅ヶ崎地区』茅ヶ崎市教育委員会、二〇一八年

第53回 茅ヶ崎市郷土芸能大会 写真記録担当報告

木村 宏

茅ヶ崎市郷土芸能大会に、写真記録班の一員として参加しました。第53回と由緒ある大会の記録係の一端を担う大切なお役目、肩の荷が重かったです。

令和七年十一月二十三日（日）十三時少し前、茅ヶ崎市民文化会館正面大階段に、上赤羽根太鼓保存会のメンバーが陣取り、触れ太鼓をもつて、『これから、茅ヶ崎市郷土芸能大会が始まるよ！』と、通行の人々に威勢よく呼びかけました。さて、定刻十三時に、神奈川県立茅ヶ崎高等学校文楽部のメンバー

に拠る恒例の「一人遣い文楽」によって幕が切つて落とされました。この演目は、五穀豊穣・国家安穏を祈り、舞台を清める意味を込めて、毎年幕開けに舞われています。演目の見どころは、最初に出る「白の莊重」や、力強く躍動的な舞い方で鈴を振ったり種を撒く仕草を見せたりしながら、全身で激しく舞う様子です。また愉快な演出や、華やかな舞台も見どころの一つといわれています。

賑々しく舞台が清められたところで、司会を務める八幡聖美さんが袖に出て、先ず自己紹介のあと、各出演団体代表の茅ヶ崎郷土芸能保存協会々長 小川勇次さんを紹介し小川さんの挨拶がありました。続いて主催者の茅ヶ崎市教育委員会教育長 青柳和富氏と茅ヶ崎市長 佐藤光氏の挨拶があり、保存会副会長 村山守さん、市教育委員会教育推進



部 松岡智紀部長、同部社会教育課 仲手川武課長の紹介がありました。

綻帳が一旦降り、舞台上の片付け・準備が行われました。

またここで、全演目終了後に抽選を行い、柳島凧の会作成の飾り凧、上赤羽根太鼓保存会の小沢さんが丹精込めて育てられた採れたての野菜、南湖郷土芸能保存会から提供の品など、数々の景品が用意されていることが披露されました。

さて、舞台の準備が整つたところで、各保存会の練習の成果である演目が順に披露されました。

○ 茅ヶ崎の民話「晴明井戸」 茅ヶ崎民話の会

○ 柳島御座敷甚句 柳島エンコロ節保存会

○ 圓蔵ばか踊り 圓蔵祭囃子保存会・岡崎支部

○ (市指定重要文化財) 芹沢焼米搗唄 芹沢焼米搗唄保存会

○ 上赤羽根甚句 上赤羽根太鼓保存会

○ (市指定重要文化財) 南湖麦打唄 南湖麦打唄保存会

○ 南湖餅搗唄 南湖餅搗唄保存会

○ 上赤羽根祭囃子 上赤羽根太鼓保存会

○ 芹沢サラ盆唄 芹沢焼米搗唄保存会

○ (市指定重要文化財) 圓蔵祭囃子 圓蔵祭囃子保存会

○ 柳島大漁船上げ唄

○ 柳島大漁船上げ唄好友会と中島中学校生徒 (一年生)

○ (市指定重要文化財) 柳島エンコロ節

○ 柳島エンコロ節保存会と中島中学校生徒 (一年生)

練習の甲斐あつて好演の連続でした。

長年、日本各地に伝わってきた祭りや伝統行事が人口の減少による担い手不足などで存続の危機にさらされています。伝統を次世代にいかに伝承していくか、それぞれの地域で官民一体となって知恵を絞りたいものです。

祭や伝統行事への参加を通じて、その土地を周知することができれば、魅力の発信や当地への移住の促進などにもつながるはずと考えます。祭りや伝統行事を取り巻く環境は変化しています。動物同士を戦わせたり、苦痛を強いたりするような行事は批判を受ける時代になりました。郷土の伝統や文化の存続について議論する際は、こうした視点も必要だと思います。

一度は休止に追い込まれても、その後の社会情勢の変化などで再開の機運が高まるケースもあります。出場者の減少傾向が続き、運営団体が担い手を確保するために条件を見直した結果、女性の参加を認めたという事例もあるようです。伝統を守るために、祭りの形態も変えるのもやむを得ないと判断したのでしょう。

また、第一次・第二次産業の衰退や縮小によつて、農作業などを実際に見聞する機会は減少しました。聞き伝えや想像で演じざるを得なくなっているのではないだろうかと考えると、演じ手の苦労も思いやられます。

郷土芸能などの復活には、記録された映像や用いられた道具、文化財指定時の調査記録が役に立つたという話を聞きます。たとえ文化財に指定されていなくとも郷土芸能は先人から受け継いだ宝物であり、私たちの財産です。自治体と民間が連携することが欠かせないのではないかでしょうか。

各保存会の舞台に目を見張りながらでしたが、写真で記録する今回の役目はなんとか全うすることができたと思います。







事業予定 令和8年2月～4月

- 『茅ヶ崎市史』4巻の輪読会 第18回 2月3日（第一火）
13時30分～図書館第2会議室 19回 3月3日 図書館第3会議室
- ・20回 4月7日 図書館第2会議室予定
- 史跡・文化財めぐり 3月21日（土）通算316回 市内萩園・今宿を訪ねる（集合：茅ヶ崎駅改札前9時15分 午前中実施

☆令和8年度の事業計画は検討中です。

『郷土ちがさき』164号正誤表

- | | | |
|-------------------|--------------|---------|
| 19頁（下段 後ろから4行目） | 図書館二会議室 | → 第二会議室 |
| 26頁（短歌七首 遠き日 作者名） | 間克子／藤 | ↓ 藤間克 |
| 子 | | |
| 40頁（上段 市史輪読会の回数） | 9月2日は正しくは13回 | |
| で、12月2日は16回となる | | |

【編集後記】

165号はよんどころない事情のために発行をひと月遅れにさせて頂きました。それにも関わらず原稿はいつも通り多くの皆様に寄せて頂きました。ありがとうございました。
新年を迎えすでに一ヶ月を過ぎましたが、郷土会の役員一同から会員の皆様のご多幸をお祈りしております。今年もよろしくお付き合いの程をお願い致します。

また、ご意見、ご質問などございましたらお寄せください。

編集担当 平野文明 TEL 090-8173-8845

令和 8(2026)年 2 月 1 日発行

郷土ちがさき(165 号)

茅ヶ崎郷土会